

学生の声

研究雑感

工学研究科 電気工学専攻 雨宮研究室 博士後期課程2年 重 政 茉 於

最近、いわゆる「追い出し部屋」から脱出した。……と書くと言弊があるかもしれない。雨宮研究室には学生室が一つあり、多くの学生はその部屋を居室とする。ところが私の場合、修士課程を終え、博士後期課程が始まるというときに、落ち着いた環境で研究できるようにという教授のご配慮により、ほとんどの人があまり立ち入らない隅の別室に席替えとなった。それ以来、何かと研究がうまく進まないことが多かった気がする。先生方より、論文にせよ何にせよまずは学生どうして議論せよと言われるのだが、他人から物理的に隔離されたことで人と簡単に議論を交わすことが難しくなっていたのだろう。それに気づいて以来、学生室の共用スペースに自前のノートパソコンを置いて居座り、その辺の後輩の席にふらっと話しかけに行くという、まるで自席を持たない短期留学生のようなスタイルを取るようになった。そのおかげか、最近は物事が比較的スムーズに進んでいるように思われる。なお、先日になって正式に席替えとなった。

よくあるイメージとして、研究者は独り部屋にこもって思案するものと一般的に思われがちである。しかし、読者の皆様ならご存じの通り、研究とは決してそういうものではない。実験から考察、ディスカッション、論文執筆に至るまで、チームメイトとのコミュニケーションが必要不可欠であり、それを円滑に行うためには、まずチームメイトと会話がしやすい環境に身を置くことが重要であることがよくわかった。

研究のガソリン

エネルギー科学研究科 エネルギー基礎科学専攻 松田研究室
博士後期課程2年 朝 田 秀 一

思えば、私の研究の始まりは歪なものだった。学部生で研究室に配属された頃はコロナ渦真っ只中、講義はすべてオンラインで部屋から受け、研究室に行ったこともなく、実家で半ば引きこもりのような生活を送っていた。おかげで最後に父の介護に携われたものの、家族を失った傷はあまりにも酷く、再び研究室に人が集まる頃には外を歩けなくなっていた。ようやく近づく電車で誘われず研究室に通えるようになる頃には修士1年の冬に差し掛かっており、もう就職か進学か決断を迫られる季節に。あの時博士課程に進むことを選んだのはひとえに、今日はまだ白線の先にフラッと踏み出さない理由が、明日も明後日も続いてくれるだろう実験しか思いつかなかったからかもしれない。

さて、少々暗い話になってしまったが、最近は松田先生の指導のおかげで、1本目の論文がまとまったり、学会で講演賞をいただいたりと、ようやく一般的なDらしくなってきた。あれから4年半、私が精神を持ち直すカギになったのは、間違いなく小春六花というキャラクターだった。この子の声を聞いた瞬間、共に生きてきた存在しない記憶を思い出し、私を苦しめていた幻聴は、あの日から救急車の音ではなく六花の声になった。今は少しばかりこのキャラのグッズを自分のデスクに置いており、実験がしんどい日もデスクに戻れば力が湧き出る。いつか彼女の名を広げるに足る人間へと至る日を夢見れば、研究により一層力が入る、まさに研究のガソリンだ。

ただ、電電出身の人間が、ただの受容者というのも味気ない。そうだ、3Dプリンタにレーザー切削、NC切削でもいい、自室の機材たちを使えばグッズを作るのは造作ない。絵はどうしようか、他人の絵を勝手に使うわけにもいくまい、勉強して最近納得できるようになってきた。電電ならば電子工作は当然お手の物、安いマイコンとモジュールを輸入すればボイス付きのアイテムは作り放題だ。プログラミングも講義で習った、VRアプリを開発したがこの実在感は癖になる。最近なぜだか分からないが、毎日時間が足りていない。電電出身で本当に良かった。

最後に松田先生へ。どうか信じてください、これはガソリンです。その分エンジンは回っています。まさにこれを執筆する裏で、実験は修羅場を迎えておりますが、どちらも裏切らないためには走り抜けるしかないのでしょう。